－所蔵作品紹介－

武田　範芳　TAKEDA Noriyoshi

二人の奏者

ふたりのそうしゃ

作品データはこちら

武田範芳（大正２年～平成元年）は旭川の生まれ。上野山清貢、牧野虎雄に師事しながら、本郷や目白の美術研究所で絵画を学んだ。昭和14年、旺玄社の目白賞受賞で頭角を現し、昭和32年から同36年までは、一線美術会の運営委員を務めている。

昭和37年渡欧。翌年からパリのル・サロンやサロン・ド・シュビジィ国際美術展などで、数々の賞を得る華々しい活躍が始まった。滞欧中の画題は、主に、次の三つに絞られていた。ひとつは、パリをはじめとするヨーロッパの古典の街角を描くものである。もうひとつは、ギリシャや南仏の港町を舞台に、暖かい陽光がさす海や港を題材にした。そして第三に、彼が好んだモチーフが、ピエロや手品師そして音楽隊などノスタルジーを誘うような人々であった。

「二人の奏者」も、こうした第三のグループに属する作品といえよう。ひたむきに演奏する二人の楽士が画面一杯に描かれている。単純素朴なフォルムと、抑えられた色彩が、見る者に親近感を覚えさせる。異郷の地の生活が長かった武田が、彼らにおくる眼差しは暖かい。そして、童心をかきたてる優しさに満ちている。

旭川美術館だより「氷華」No.26（1991.３発行）「収蔵作品から」より